

地域人口の食行動パターン

—東日本と西日本—

内野 澄子

序 節

急激な都市化、はげしい全国的な人口流動、マス・コミの全国的浸透と生活水準の加速的増大と高度化にともなう、人口の生活意識、生活様式は急速に画一化の過程を辿っている。このような急激な社会的、経済的変動の中で食生活あるいは食意識がどのように変化し、そしてまた地域格差がどのように解消しあるいは残存していくかは、国民生活の望ましいありかたの観点から注目すべき課題である。

ここでは主食形態を中心としてその選択行動が人口の経済的、社会的および人口学的特性（年齢および移動）ならびに地域性によってどのように影響されているかを考察したものである。

人口の経済的、社会的および人口学的属性が主食形態の選択に影響を与えることはあきらかであるが、このような影響の浸透の中で地域という特性がそのような影響を喪失しつつあかどうかを検討することがここでの基本的目的である。

本稿は、上述の目的のために昭和43年度に本研究所が行なった「人口の移動性と社会的・経済的要因との関係に関する調査¹⁾」において行なった主食調査結果を再集計し、分析したものである。地域の影響を検討するために、調査を行なった都市を便宜上次の如く地域区分した。

- 北海道 （札幌市、苫小牧市）
- 東北 （盛岡市、大船渡市、山形市、天童市）
- 関東Ⅰ （大宮市、本庄市、練馬区、江戸川区）
- 関東Ⅱ （宇都宮市、小山市、長野市、岡谷市）
- 中部 （福井市、鯖江市、静岡市、沼津市、守山区、江南市）
- 京阪神 （松原市、寝屋川市）
- 中国 （鳥取市、境港市、広島市、府中市）
- 西南部 （高知市、中村市、福岡市、柳川市、宮崎市、日向市）

しかし、調査対象の市は、それぞれの8個の地域を代表するようにデザインされたサンプルでないため、このように区分することは極めて危険であることはいうまでもない。しかし、それにもかかわらず分析結果はそれぞれの地域の特性をかなりよく反映しているように思われる。

ここでは主要主食形態の摂取状態に対する年齢、教育水準、職業の3個の人口学的、社会経済的属性ならびに移動経験の有無の影響と共に地域による差異をあきらかにすることを試みた。

1) 本稿に関連する論稿としては、昭和43年度実地調査「人口の移動性と社会的・経済的要因との関係に関する調査報告」第1部第Ⅲ章・都市人口の主食形態と人口移動(内野)、昭44.3、第2部第Ⅲ章・都市人口の主食選択行動の動向(内野)、昭45.2 および『人口問題研究所年報』第14号(昭和44年度)、抽稿、「都市人口の人口学的、社会経済的属性と主食選択行動」を参照されたい。

この分析におけるもっとも重要な結果は、主食形態の選択にあたって、人口の経済的、社会的、人口学的特性の影響と地域性の影響があきらかにあらわれていること、特に東日本と西日本による差異が存在していることである。主食選択という行動が経済的、社会的要因によって強く影響されることはいうまでもないが、家族規模や移動の人口学的地域特徴や気候等の自然的条件の中に形成された地域的特性の影響も無視できないように思われる。特に、生活意識や生活構造と地域性の関係は、政策上の観点からなお一層追求されなければならない課題である。

第1章 主要主食形態分布の地域的特性

いずれかの地域において10%前後以上の比重をもっている主食形態を主要主食形態とすると、3食米飯、朝パン(昼・夕米飯)、昼パン(朝・夕米飯)、昼めん(朝・夕米飯)の4種の形態が該当する。

この4種類の主食形態の各地域における摂取割合を示すと表1と図1の如くである。

表1 主要主食形態分布の地域比較

(%)

主食形態	北海道	東北	関東Ⅰ	関東Ⅱ	中部	京阪神	中国	西南部
3食米飯	51.3	63.2	44.7	55.9	66.0	50.8	65.4	66.1
昼めん	12.7	10.9	8.4	5.9	4.5	2.4	2.9	5.5
昼パン	9.0	8.7	7.6	10.4	5.5	3.0	5.0	5.9
朝パン	8.0	3.5	10.4	5.8	9.2	21.7	14.3	9.8
その他	19.0	13.7	28.9	22.0	14.8	22.1	12.4	12.7
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

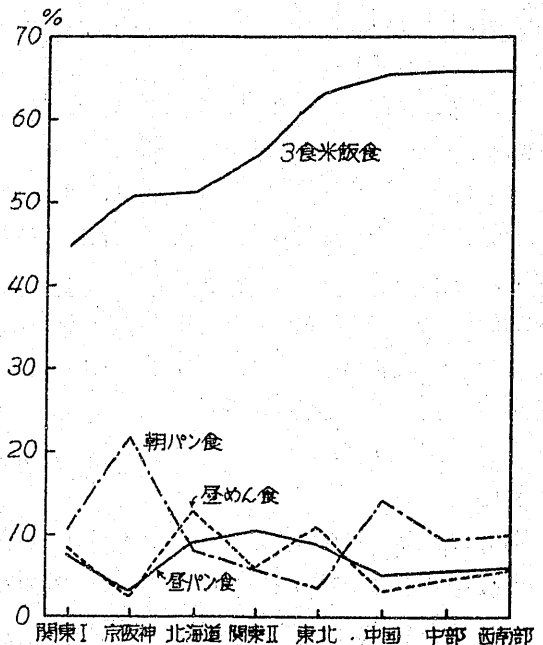
主食パターンの構造を決定するものは、3食ともに米飯といった米を中心とした伝統的な形態をとるものの割合である。この伝統的な主食形態の占める割合のいかに、それぞれの地域の主食形態の変化、多様化の度合を示す基本的指標である。

3食ともに米飯を中心とする主食形態をとるものの割合は、表1に示されているように、ほとんどすべての地域において50%以上を示している。ただ、関東Ⅰにおいては50%以下という最低水準を示していることが注目される。この関東Ⅰの調査対象地域である東京都区部や周辺地域においては、3食米飯という伝統的、基本的パターンをとるものが、半分に低下し、その他の主食形態をとるものが50%を超えていることは特に注目してよい。他の地域におけるこの主食パターンの占める割合は、西南部、中部および東北においてももっとも高く、それぞれ60%以上を占めている。

3食米飯の形態に次いで比較的主要な主食形態である昼めん、昼パン、朝パンについてみると、東日本と西日本とにおいてかなり特徴的な傾向がみとめられる。

昼めんの主食形態は、北海道の13%をトップとして東北、関東Ⅰにおいて高い割合を示しているの

図1 主要食形態の分布構造の地域比較



に対して、京阪神、中国では著しく低くなっている。中部、西南部もかなり低い。

ほぼ関東と中部を境として東、西においてかなり著しい格差がある。このような傾向は昼パンの主食形態にもみとめられる。しかし、朝パン食の主食形態摂取の傾向はかなり複雑である。西日本においては朝パン食が主要な主食形態となっており、京阪神は22%、中国14%、西南部10%と高い水準を示している。関東Ⅰは西南部とほぼ同水準の10%を示しているが、東北、関東Ⅱの地域では著しく低い。

西日本は、3食ともに米飯というパターンが一般に高水準にあり、その他の主食形態では朝パン食に集中するという特徴がみられる。しかし、東日本の特徴は、昼食におけるめんおよびパンの形態の高い水準にみられる。関東Ⅰにおいては、この東日本の特徴と共に大都市や西日本にみられる朝パン食が比較的高い水準を示している点に特徴がみられる。東京を中心としたこの地域における以上のような主食形態の多方向的分裂は、東京の構成人口が全国各地域を基盤としていることと巨大都市化の影響によるものと思われる。

第2章 年齢別にみた主食選択の地域的特徴

第1節 年齢別にみた地域的特性

調査対象地域別に対象者の年齢別に主要主食形態の選択の傾向をみると次表の如くである。主要主食形態は前章と同じく4種類の形態をとった。まず、ここでは定着者、移動者の区別を行なわないで両者をあわせた総数についての主要主食形態の分布を示した。

そこで、3食ともに米飯というパターンをとるものの割合を年齢別にみたばあい、どの年齢層においてももっとも高く、またもっとも低いかを地域別にみると図2の如くである。一般に、3食ともに米飯という形態をとるものの割合は、もっとも高い年齢層、たとえば60歳以上においてもっとも高く、この傾向は地域別にみても共通である(表2参照)。そこで、図2では60歳以上を除いた年齢階級別について示されている。

この調査結果による注目すべき傾向は次の諸点にある。

第1に、もっとも注目すべき点は、3食米飯パターンの高い割合が、若い年齢層と高い年齢層の両極に分布していることである。もっとも若い20~29歳において3食米飯のもの割合がもっとも高いのは、北海道、東北、関東Ⅱ、中国においてであって、さらに50~59歳階級においてこのパターンがもっとも高いのは、中部、京阪神、西南部においてである。

第2に、若い年齢層において3食米飯者が少なく、高い年齢層において多いという一般的常識に合致する傾向を示しているのは京阪神のみである。

第3の、特徴としてあげられるのは関東Ⅰであって、3食米飯者の割合の最高は30~39歳であり、最低は40~49歳ではあるが、実際には各年齢階級間の差は無視しうるほど小さい。60歳以上の47%を除いてすべての年齢階級が44%台にある。

第4に、東北と中国の類似性があげられる。20~29歳層において3食米飯の割合が最高であり、30~39歳において最低であり、かつこれらの割合もほぼ同じような水準にあることが注目される。

図2 3食米飯者の割合の最低・最高年齢階級(60歳以上除く)

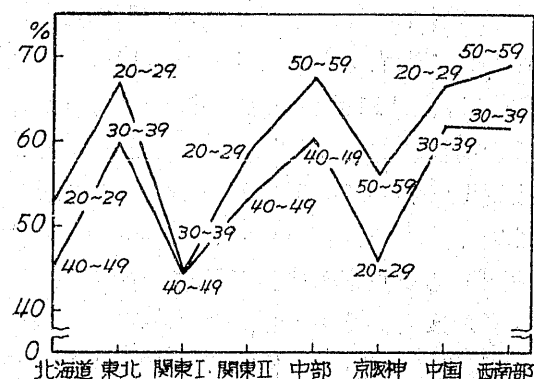


表 2 年齢別にみた主要主食形態選択の地域的特徴

(%)

年齢階級	北海道	東北	関東 I	関東 II	中部	京阪神	中国	西南部
(1) 3食米飯者 (111)								
総数	51.3	63.2	44.7	55.9	66.0	50.8	65.4	66.1
20 ~ 29	52.7	66.8	44.3	58.4	66.7	45.7	66.6	65.6
30 ~ 39	50.5	59.7	44.6	53.2	66.3	50.2	61.9	61.6
40 ~ 49	45.2	59.9	44.1	53.1	60.2	49.8	66.0	66.2
50 ~ 59	50.8	64.3	44.5	53.3	67.2	56.0	65.0	69.0
60 ≦	70.9	68.4	47.4	63.3	70.2	61.3	69.6	71.8
(2) 昼めん, 朝・夕米飯者 (131)								
総数	12.7	10.9	8.4	5.9	4.5	2.4	2.9	5.5
20 ~ 29	10.1	9.6	6.0	4.6	2.4	1.9	1.1	5.0
30 ~ 39	11.1	13.2	8.9	6.3	5.3	1.7	3.0	6.4
40 ~ 49	17.5	14.3	10.2	6.9	6.9	2.5	4.0	7.7
50 ~ 59	15.0	8.0	8.8	7.4	5.2	4.8	4.4	4.9
60 ≦	7.6	6.3	9.0	5.1	3.7	2.8	2.6	1.8
(3) 昼パン, 朝・夕米飯者 (141)								
総数	9.0	8.7	7.6	10.4	5.5	3.0	5.0	5.9
20 ~ 29	9.2	5.5	7.2	11.4	5.0	2.4	3.0	4.6
30 ~ 39	10.8	8.2	5.7	9.7	4.3	3.7	5.7	6.1
40 ~ 49	6.5	11.0	8.9	10.6	5.5	2.0	5.4	5.4
50 ~ 59	10.0	11.5	7.8	12.1	6.6	3.0	6.1	6.8
60 ≦	8.9	8.6	10.8	8.4	7.0	4.2	4.8	6.9
(4) 朝パン, 昼・夕米飯者 (411)								
総数	8.0	3.5	10.4	5.8	9.2	21.7	14.3	9.8
20 ~ 29	7.7	4.4	14.4	6.8	11.4	26.2	17.2	10.2
30 ~ 39	8.4	4.2	10.9	6.5	10.0	22.5	15.0	11.8
40 ~ 49	9.9	2.9	10.7	5.9	9.4	23.2	13.8	9.4
50 ~ 59	5.0	2.1	6.6	4.1	7.9	16.3	11.6	6.5
60 ≦	3.8	3.0	4.9	4.3	5.1	11.3	12.5	9.5

備考：総数および各年齢階級についての%は、すべての主食形態の対象数を100としたばあいのそれぞれの主食形態が占める割合を示したものである。

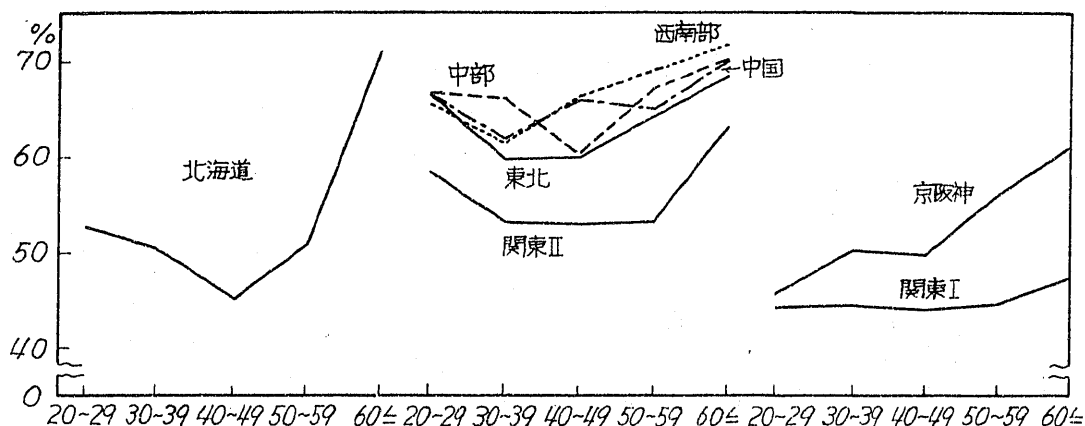
以上の如く年齢別にみた米飯中心のパターンは、地域によって著しく異なっている。京阪神の年齢別パターンは、都市化社会における典型的な傾向をあらわすものであり、そして次第に年齢間格差が収縮して関東 I パターンに接近するものと予想することは不合理ではないであろう。しかし、上述の農村的な地域内の都市(東北, 中国, 関東 II)にみられるような若い年齢層における3食米飯のパターンの高い割合は、新しい逆転傾向をあらわすものであるか、あるいは過渡期的な現象であるのかは、にわかに判断することはこんなである。

第2節 3食米飯パターンの年齢別構造からみた地域類型

3食ともに米飯のパターンの年齢別にみた一般的な特徴は前節にのべた通りであるが、次にこの主食パターンの年齢別構造を、その特徴によって地域類型化を行なってみよう。

各年齢階級における3食米飯者の割合の分布構造を地域別にみると図3の如くほぼ3個の形態に類型化することができる。

図3 3食米飯パターンの年齢別構造からみた地域類型



第1は巨大都市地域型である。3食米飯者の割合が全般に低く、また若い年齢階級ほどその割合が低く、高い年齢になるほど高くなる型であって、京阪神および関東Iの両地域にみられる。

第2は、3食米飯者の割合が若い年齢と高年の両極において高く、中間年齢層において低くなっている鍋型のものである。関東IIがその典型的な構造を示している。東北、中部はこの類型に属するし、また中国、西南部は変形してはいるがほぼこの類型にふくめることができよう。

第3は北海道型である。基本的には第2の型に類似してはいるが、40~49歳の著しく低い3食米飯者割合を底として低年齢および高年齢に向ってこの割合が急激に上昇している点に特徴がみられる。

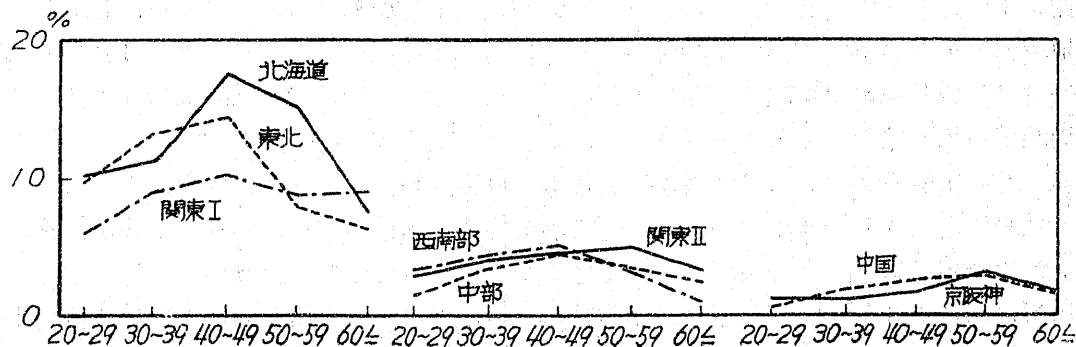
第1の巨大都市型を除いて、注目される点は、多くの地域（北海道、東北、関東II、中部）の40~49歳階級においてみられた3食米飯者割合の最低水準である。何故、この壮年期年齢層において3食米飯者の割合が高くなっているか、注目すべき傾向といわねばならない。

40~49歳階級は、終戦時において17~26歳の青年であって、青年期において主食選択に異常な経験をもった人口である。すなわち粉食への移行を強制され、それがもっとも定着しやすかった年齢人口であったことが、このような特徴をもたらしたと解釈することもできよう。それに反し、20~29歳の若い人口は、食糧生産の増大から過剰への過程に育った人口であることが、40~49歳人口の主食選択とは異なった行動をもたらしたとも考えられよう。

第3節 昼めんパターンの年齢別構造からみた地域類型

主要主食形態の1つとしての昼めん、朝・夕米飯のパターンの年齢別構造からみた地域の特徴をみてみよう（表2および図4参照）。

図4 昼めんパターンの年齢別構造からみた地域類型



昼めんパターンを年齢別にみると一般に40～49歳の中年階級において多い。しかし、各年齢階級別にみた分布構造からみるとその水準からみて図4のように3個のグループに分けることができる。第1は、各年齢階級を通じて著しく高く、ほぼ10%以上の水準にあり、かつ40～49歳を頂点とした山型のグループであって、東日本の北海道、東北、関東Ⅰがふくまれる。しかし東日本の関東Ⅱは、このパターン水準が低く、第2のグループにふくまれる。

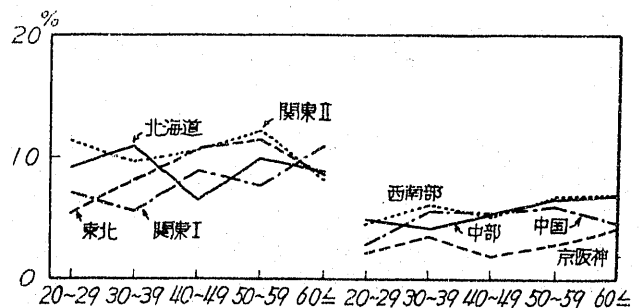
第2は、各年齢階級の昼めんパターンをとるものの割合が5%前後にある地域で、上述の関東Ⅱの外に西南部、中部がふくまれる。

第3のグループは、このパターンの割合がさらに低く、3%以下にある地域で、中国と京阪神がふくまれる。西日本では西南部を除き、このパターンは極めて低い水準にある。この昼めんパターンも東日本と西日本において基本的に異なった主食選択のパターンである。

第4節 昼パン食パターンの年齢別構造からみた地域類型

第3の主要主食形態としての昼パン、朝・夕米飯パターンの年齢別分布構造によって地域の特徴をみると図5の通りである(表2参照)。昼パン食形態の割合については、年齢によるなんらかの傾向はみとめがたい。地域別にみると東日本において高く、西日本において低いという特徴がみられる。特に京阪神においては低く3%水準にあるのに対して、東京をふくむ関東Ⅰはかなり高い割合を示している。いずれにしても昼パン食といった軽食化(パンと牛乳等)傾向であるこの形態が東日本と西日本において異なった水準を示していることは注目される。

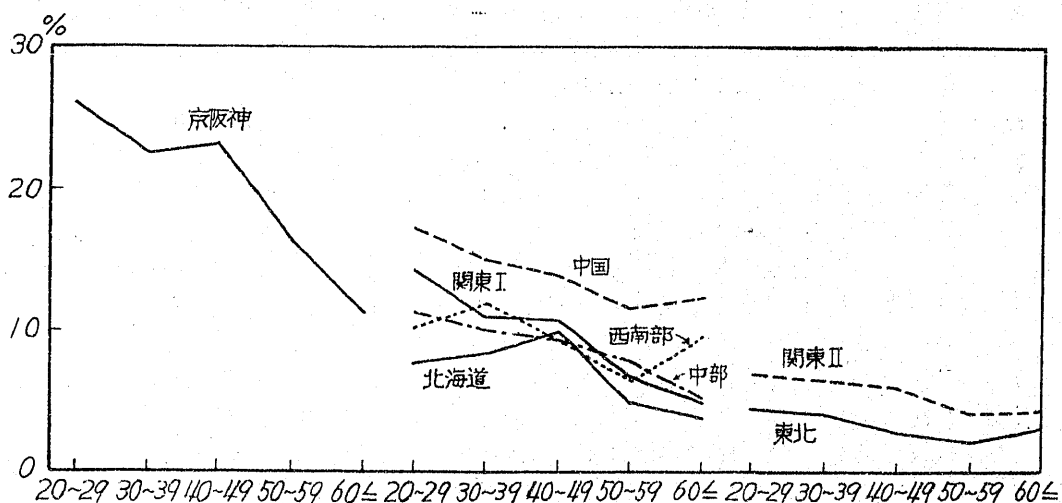
図5 昼パン食パターンの年齢別構造からみた地域類型



第5節 朝パン食パターンの年齢構造からみた地域類型

日本人口の主食形態変化の特徴は、朝パン、昼めん、昼パンの3個の形態の平行的進展である²⁾。それは食形態に対する欧風的嗜好と伝統的嗜好の混在的表現ともいえよう。

図6 朝パン食(昼・夕米飯)パターンの年齢別構造からみた地域類型



2) この点については日本人の主食形態変化の段階設定を行なった拙稿、昭和38年度「労働力人口移動実態調査報告」都市の部、第3巻、人口移動と生活行動、1～3ページ参照。

年齢別にこのパターンの割合をみるとほとんどすべての地域において、若年齢において高く、高年齢において低くなるという傾向がみられ、地域による著しい差異はない。

地域別にみた分布構造の差異はその水準にある。図6にみられるように3個の類型に区分することができる。

第1は、このパターンの水準が著しく高く、かつ年齢階級間の格差が著しい京阪神である。50歳未満までは20%という高水準にあり、60歳以上では10%余の低水準にある。

第2は、40～49歳における10%前後を中心として若年齢に高く、高年齢に低いという型を示している地域で、西日本および関東Ⅰ、北海道がふくまれる。

第3のグループは朝パン食パターンをとるものの割合が5%前後という低水準にある地域であって東日本の関東Ⅱ、東北がふくまれる。

東日本と西日本を比較すると、朝パン食パターンは全般に西日本において高いという特徴がみとめられる。

表3 年齢別、定着者・移動者別にみた主要主食形態選択の地域的特徴 (%)

年齢階級	北海道		東北		関東Ⅰ		関東Ⅱ		中部		京阪神		中国		西南部	
	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動
(1) 3食米飯者 (111)																
総数	40.4	53.9	74.0	55.8	51.5	42.0	62.5	52.4	71.5	62.8	66.7	47.2	69.2	64.7	72.4	63.3
20～29	37.0	58.2	77.6	60.7	47.9	42.2	67.0	53.0	70.6	64.0	52.8	44.0	66.2	66.8	64.9	65.9
30～39	36.2	54.0	71.1	51.3	50.3	42.5	61.1	48.7	71.2	63.1	63.5	47.8	59.8	63.2	68.1	58.5
40～49	41.3	46.1	71.9	53.4	55.5	39.6	56.0	51.8	68.9	55.9	76.5	44.4	73.3	63.1	77.8	62.4
50～59	41.7	51.9	75.7	56.3	48.7	43.2	57.5	51.3	70.3	65.5	72.4	52.6	74.0	60.3	86.7	62.9
60≦	81.8	69.1	75.5	60.6	60.3	43.0	70.2	59.9	78.0	66.0	86.1	52.8	74.2	66.0	74.8	70.3
(2) 昼めん、朝・夕米飯者 (131)																
総数	10.9	13.1	8.0	12.8	7.4	8.8	5.8	6.0	3.6	5.0	2.4	2.6	3.2	2.9	3.8	6.2
20～29	9.3	10.5	5.6	11.8	6.0	5.9	2.2	6.1	1.5	3.0	—	2.3	1.4	1.0	5.3	4.8
30～39	6.9	12.1	11.6	14.3	10.3	8.4	6.1	6.4	5.5	5.2	1.6	1.8	3.6	2.7	4.4	7.3
40～49	15.2	17.9	7.6	17.8	7.3	11.4	8.9	5.8	4.1	8.2	2.9	2.4	6.7	2.9	3.0	9.3
50～59	25.0	13.9	6.4	9.0	5.3	9.9	9.4	6.5	6.5	4.5	4.8	5.1	2.0	5.7	4.1	5.2
60≦	9.0	7.4	6.9	5.6	7.4	9.5	4.0	5.7	1.6	4.8	2.8	2.8	1.7	3.3	0.8	2.3
(3) 昼パン、朝・夕米飯者 (141)																
総数	12.6	8.2	8.2	9.1	9.0	7.0	10.4	10.4	5.1	5.7	3.0	3.0	5.3	4.8	5.3	6.1
20～29	11.1	8.5	6.2	5.2	10.2	5.4	12.5	10.8	5.6	4.5	4.2	2.0	4.3	2.3	7.4	3.3
30～39	17.2	9.2	6.8	9.2	7.7	4.9	8.2	10.6	3.7	4.6	3.2	3.8	7.7	4.3	5.7	6.3
40～49	15.2	4.6	12.9	10.0	8.2	9.2	10.7	10.5	6.8	4.9	2.9	1.8	4.2	5.2	3.0	6.1
50～59	—	11.1	9.3	13.1	11.8	6.6	16.0	10.3	5.4	7.3	3.4	2.9	6.0	6.2	3.1	8.0
60≦	—	10.3	6.9	10.6	5.9	12.5	5.6	9.7	3.3	9.0	—	5.7	1.7	7.2	5.7	7.4
(4) 朝パン、昼・夕米飯者 (411)																
総数	9.8	7.6	1.5	4.8	5.5	12.4	2.4	7.6	8.3	9.8	16.2	22.9	12.5	15.4	8.0	10.6
20～29	13.0	5.9	3.1	5.2	8.4	17.8	2.7	9.4	10.7	11.9	20.8	27.5	15.8	17.8	8.5	10.9
30～39	8.6	8.4	1.9	5.9	4.5	13.3	1.2	9.4	9.5	10.3	14.3	24.0	15.5	14.7	10.0	12.6
40～49	6.5	10.6	1.2	3.8	6.4	12.5	3.6	7.0	6.8	10.7	11.8	25.4	7.5	16.2	7.4	10.1
50～59	8.3	4.6	—	3.5	1.3	8.2	2.8	4.7	4.9	9.5	20.7	15.3	10.0	12.4	1.0	8.4
60≦	—	4.4	0.6	5.6	2.9	5.5	2.4	5.3	6.0	4.5	11.1	11.3	10.0	14.4	9.8	9.4

第6節 年齢別，定着者・移動者別にみた主要主食形態選択の地域的特徴

前各節におけると同様，4種類の主食形態について定着者（移動経験のないもの）と移動経験者に区分してその選択の傾向についてみると表3の通りである。なお紙幅の関係上詳細な分析は省略する。

第3章 教育水準からみた主要主食選択の地域的特徴

第1節 3食米飯パターンの教育水準別にみた分布構造の地域類型

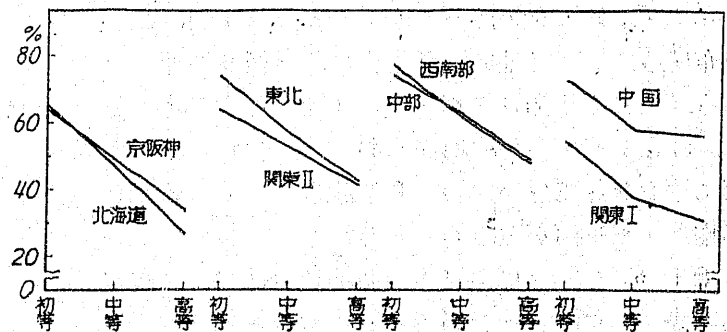
教育水準が主食選択の行動による影響が地域によってどのように異なるかを考察してみよう。教育水準は初等，中等，高等の3階級に区分した。またこの教育水準別に定着者，移動者に分類し，その主食選択の傾向を，主要主食形態（年齢別のばあいと同じく4個の形態）の分布によって考察してみた。

表4 教育水準別にみた主要主食形態選択の地域的特徴 (%)

教育水準	北海道	東北	関東Ⅰ	関東Ⅱ	中部	京阪神	中国	西南部	
(1) 3食米飯者 (111)									
総数	51.3	63.2	44.7	55.9	66.0	50.8	65.4	66.1	
初等教育	65.0	74.3	58.1	64.0	74.0	64.3	72.7	77.0	
中等教育	47.1	57.7	48.0	52.9	62.9	49.7	58.7	62.4	
高等教育	27.6	42.5	35.8	41.1	48.9	34.9	56.5	47.8	
(2) 昼めん，朝・夕米飯者 (131)									
総数	12.7	10.9	8.4	5.9	4.5	2.4	2.9	5.5	
初等教育	8.9	7.0	6.6	5.3	3.0	1.6	2.8	3.7	
中等教育	15.2	14.6	8.7	7.6	5.3	2.3	4.0	6.3	
高等教育	17.2	14.8	7.4	4.4	7.4	2.8	0.8	8.1	
(3) 昼パン，朝・夕米飯者 (141)									
総数	9.0	8.7	7.6	10.4	5.5	3.0	5.0	5.9	
初等教育	8.5	7.3	6.3	7.8	4.4	2.2	2.7	4.1	
中等教育	8.8	8.7	9.7	11.6	5.8	2.5	5.4	6.6	
高等教育	10.4	12.8	16.8	15.1	7.9	4.8	12.3	8.6	
(4) 朝パン，昼・夕米飯者 (411)									
総数	8.0	3.5	10.4	5.8	9.2	21.7	14.3	9.8	
初等教育	4.3	1.9	6.6	2.8	6.5	14.4	11.2	6.2	
中等教育	9.4	4.4	12.8	6.6	9.7	25.3	18.2	10.2	
高等教育	14.1	6.3	16.3	12.1	16.6	26.4	15.4	17.7	

3食米飯のパターンを教育水準別にみた分布構造を地域類型化してみると図7の如くである。3食米飯のパターンの割合が教育水準の高低と密接な関係にあることは，各地域を通じて全く同様である。いいかえれば，教育水準の低い階層において3食米飯のパターンの割合がもっとも多く，教育水準の上昇にともなってこのパターンの割合

図7 3食米飯パターンの教育水準別にみた分布構造の地域類型



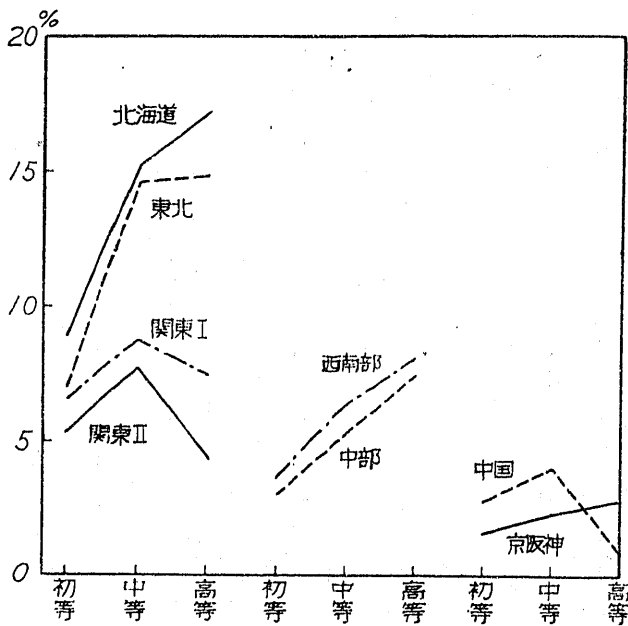
が規則的に低下する傾向である。

地域的な差異は、このような分布構造自体の水準と各教育水準間の割合における格差の度合のみである。このような基準によって類型化したのが図7である。

第1, 第2, 第3のグループは中等教育の3食米飯者の割合を基準として分類したものであって、各教育水準間の格差は各グループともほぼ同様である。第4グループはこのパターンの割合の水準が中等教育と高等教育の間においてあまり差がない地域である。中国と関東Iがこれにふくまれているが、前者ではこのパターンの水準が全般に高いが、後者は全般に低いという基本的な差異がみられる。

第2節 昼めんパターンの教育水準別にみた分布構造の地域類型

図8 昼めんパターンの教育水準別にみた地域類型



京阪神であって、昼めんパターンの割合が全般に低い地域である。教育水準によるパターンは両地域によって若干異なっている。

昼めんパターンの教育水準別分布の構造と水準は、東日本と西日本によって異なり、また地域によって異なっていることが注目される。

第3節 昼パン食パターンの教育水準別にみた分布構造の地域類型

昼パン、朝・夕米飯パターンの教育水準別にみた分布構造によって地域を類型化すると図9の通りである。大きく2個のグループに区分することができる。ほとんどすべての地域において、教育水準の上昇にともなって昼パンの主食形態をとるものの割合が増大する傾向がみとめられる。

第1のグループは東日本の諸地域であって、高水準の昼パン食パターンがみられる。教育水準との関

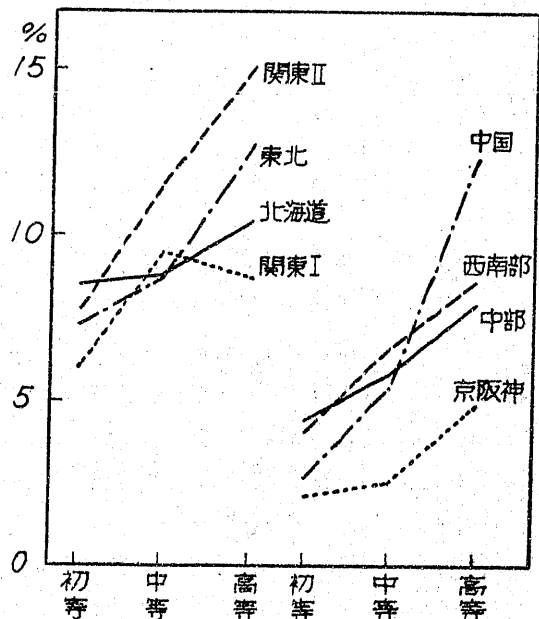
係、朝・夕米飯のパターンの教育水準別にみた分布構造によって地域類型化してみると図8の如くである。

第1のグループは、昼めんパターンの割合が全般に高く、かつ中等と高等教育での割合にあまり差がない地域である。北海道、東北、関東の各地域がふくまれるが、特に前二者においてこのグループの特徴が顕著である。ただ、関東IIにおいて高等教育のこのパターンの割合が低くなっているが、関東Iに類似したものとしてこのグループにふくめた。

第2のグループは、西日本の西南部と中部であって、第1のグループより低水準ではあるが、教育程度の高くなるにしたがって昼めんパターンの割合が急速に高くなっている。

第3のグループは同じく西日本の中国、京

図9 昼パン食パターンの教育水準別にみた地域類型



係で異例的なのは関東Ⅰであって高等教育のものが中等教育のものより低い水準の昼パンパターンを示しており、また一般に低水準にあることが注目される。

第2は、西日本諸地域のグループである。京阪神がもっとも低い水準にあることと、中国における高等教育のものの昼パン食パターンの著しく高いことが注目をひく。

いずれにしても、昼パン食パターンが教育水準と密接な相関関係を維持しながら、東日本と西日本において顕著な格差を示していることに注目すべきであろう。

第4節 朝パン食パターンの教育水準別にみた分布構造の地域類型

朝パン食、昼・夕米飯パターンの教育水準別にみた分布構造を地域別に比較すると図10のように類型化することができる。

ほぼすべての地域において、朝パン食パターンの割合は教育水準の高さと比例する傾向がみ

図10 朝パン食パターンの教育水準別にみた地域類型

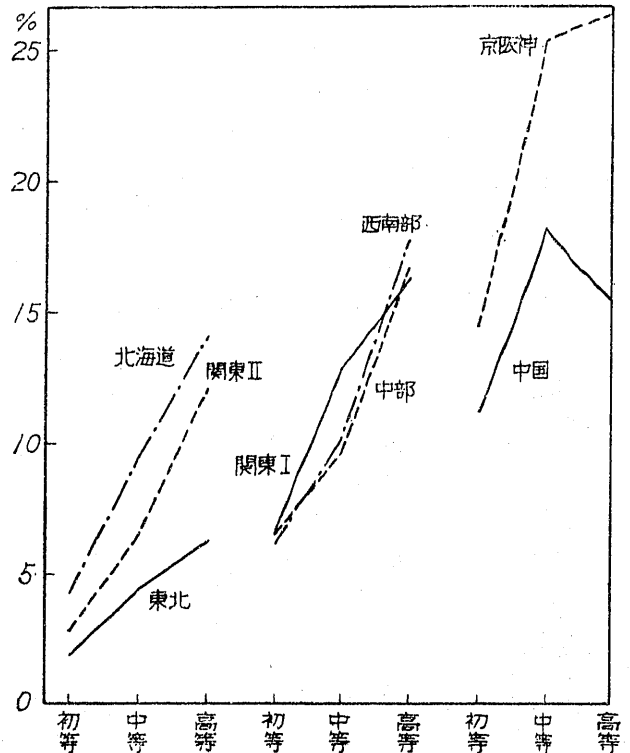


表5 教育水準別、定着者・移動者別にみた主要主食形態選択の地域的特徴 (%)

教育水準	北海道		東北		関東Ⅰ		関東Ⅱ		中部		京阪神		中国		西南部	
	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動
(1) 3食米飯者 (111)																
総数	40.4	53.9	74.0	55.8	51.5	42.0	62.5	52.4	71.5	62.8	66.7	47.2	69.2	64.7	72.4	63.3
初等教育	51.4	67.7	81.2	66.8	58.1	52.8	67.1	61.8	75.9	72.6	77.0	59.4	75.8	71.8	79.3	75.8
中等教育	38.4	50.0	63.4	54.3	48.0	34.1	58.5	49.5	67.7	59.5	60.0	48.0	63.6	58.3	68.9	59.3
高等教育	16.0	29.3	52.8	40.9	35.8	29.8	44.2	40.7	57.6	47.4	43.9	33.8	32.3	59.8	46.6	48.0
(2) 昼めん、朝・夕米飯者 (131)																
総数	10.9	13.1	8.0	12.8	7.4	8.8	5.8	6.0	3.6	5.0	2.4	2.6	3.2	2.9	3.8	6.2
初等教育	8.3	9.0	5.3	9.0	6.6	7.9	5.3	5.3	2.5	3.4	1.6	1.2	2.3	3.2	2.8	4.2
中等教育	14.0	15.6	12.8	15.7	8.7	7.9	6.9	8.0	4.7	5.7	2.3	2.7	4.9	3.5	4.1	7.3
高等教育	8.0	18.6	13.2	15.0	7.4	11.9	2.3	4.6	7.1	7.4	2.8	2.9	—	0.9	8.6	8.1
(3) 昼パン、朝・夕米飯者 (141)																
総数	12.6	8.2	8.2	9.1	9.0	7.0	10.4	10.4	5.1	5.7	3.0	3.0	5.3	4.8	5.3	6.1
初等教育	16.7	6.8	6.3	8.4	6.3	5.8	7.0	8.4	3.7	4.9	1.6	2.5	3.4	2.3	3.5	4.4
中等教育	10.5	8.2	9.3	8.4	9.7	9.4	13.2	10.6	5.2	6.2	1.5	2.7	5.3	5.5	6.9	6.4
高等教育	8.0	10.8	2.3	11.2	16.8	6.4	25.6	13.9	15.3	6.6	9.8	4.2	29.0	10.0	6.9	8.8
(4) 朝パン、昼・夕米飯者 (411)																
総数	9.8	7.6	1.5	4.8	5.5	12.4	2.4	7.6	8.3	9.8	16.2	22.9	12.5	15.4	8.0	10.6
初等教育	4.2	4.4	1.5	2.2	3.9	7.9	2.1	3.3	7.6	5.7	11.9	15.4	11.3	11.4	5.0	6.8
中等教育	11.6	8.6	1.7	6.1	5.6	15.8	2.3	9.2	8.8	10.3	21.5	25.9	13.8	20.5	9.8	10.4
高等教育	20.0	13.2	—	7.2	10.5	17.6	7.0	12.6	11.8	17.5	22.0	27.0	16.1	15.3	17.2	17.8

とめられる。しかし、その水準は地域によって著しい格差がみられる。

第1グループは東北、関東Ⅱ、北海道の東日本の諸地域であって、全般に朝パン食パターンの割合は低水準にある。特に東北はもっとも低い。

第2グループは関東Ⅰ、中部、西南部の地域であって全般にかなり高い水準の朝パン食パターンがみられる。

第3は、朝パン食パターンがもっとも高い京阪神および中国をふくむ地域である。特に京阪神では中等教育および高等教育では25%を超える高い割合を示している、また、中国では中等教育における朝パン食パターンの割合が高等教育のそれよりも高くなっている。

一般に、朝パン食パターンは東日本において低く、西日本特に京阪神において高いことが注目される。

第5節 主要主食形態の教育水準別および定着者・移動者別にみた分布構造の地域的特徴

4個の主要主食形態の教育水準別ならびに定着者移動者別にみた分布構造を地域別に示すと表5の如くである。なお紙幅の関係上詳細な分析は省略する。

第4章 職業別にみた主要主食形態選択の地域的特徴

第1節 3食米飯パターンの職業別にみた分布構造の地域的特徴

主要主食形態の選択行動の職業別分布をみると表6の通りである。職業については専門・管理的・事務・販売的、肉体的の3個の分類を行なった³⁾。

表6 職業別にみた主要主食形態選択の地域的特徴

職 業	北海道	東 北	関 東 Ⅰ	関 東 Ⅱ	中 部	京 阪 神	中 国	西 南 部	
(1) 3食米飯者 (111)									
総 数	51.3	63.2	44.7	55.9	66.0	50.8	65.4	66.1	
専門的・管理的	31.9	45.8	32.6	39.5	51.4	36.3	68.8	54.6	
事務的・販売的	44.9	54.8	37.7	49.5	59.9	36.1	56.9	60.9	
肉 体 的	64.2	77.5	53.6	66.6	77.1	65.7	74.6	77.2	
(2) 昼めん、朝・夕米飯者 (131)									
総 数	12.7	10.9	8.4	5.9	4.5	2.4	2.9	5.5	
専門的・管理的	15.5	14.8	10.6	4.5	7.0	4.5	2.7	3.6	
事務的・販売的	17.0	15.7	9.7	8.9	5.8	2.7	5.0	7.6	
肉 体 的	8.0	6.0	6.6	3.8	2.7	1.7	1.4	4.1	
(3) 昼パン、朝・夕米飯者 (141)									
総 数	9.0	8.7	7.6	10.4	5.5	3.0	5.0	5.9	
専門的・管理的	20.7	14.5	9.2	17.2	9.6	2.8	4.8	10.2	
事務的・販売的	8.3	10.3	8.5	10.9	6.0	3.4	5.7	6.0	
肉 体 的	6.1	4.5	25.9	8.0	3.1	1.7	2.9	3.6	
(4) 朝パン、昼・夕米飯者 (411)									
総 数	8.0	3.5	10.4	5.8	9.2	21.7	14.3	9.8	
専門的・管理的	9.5	4.2	15.6	10.7	10.3	24.0	11.8	13.0	
事務的・販売的	9.3	4.1	11.0	7.7	12.1	26.4	17.2	11.8	
肉 体 的	5.6	2.5	9.2	2.7	6.2	15.9	11.7	5.7	

3) この職業分類の詳細については、昭和43年度実地調査「人口の移動性と社会経済的要因との関係に関する調査」(人口問題研究所実地調査報告資料)、昭和44年3月、10~11ページ参照。

まず、3食ともに米飯という基本的
主食パターンの職業別分布の地域比較
を行なってみよう（表6および図11参
照）。

職業別にみた3食米飯者の割合は、
一般に予想される通り専門的・管理的
職業においてもっとも低く、肉体的労働
の職業においてもっとも高く、事務的
・販売的職業が中間水準を示してい

る。しかし、このような序列体系もまたそれぞれの水準も地域によってかなり著しい差異がみとめられる。このような地域の特徴によって地域を4個のグループに類型化することができる（図11参照）。

第1のグループは上述の職業別の3食米飯パターンの割合が顕著な格差を示し、かつ専門的・管理的職業のそれが低水準にある地域であって、関東Ⅱと北海道がふくまれる。

第2のグループは専門的・管理的職業と事務的・販売的職業がほぼ同じような低水準にあり、肉体的職業のみが高水準を示している地域であって、京阪神および関東Ⅰのもっとも都市化した地域がふくまれている。

第3は、第1と同じような職業別格差を示しながら、その水準が第1よりもはるかに高いグループであって西南部、中部、東北がふくまれる。

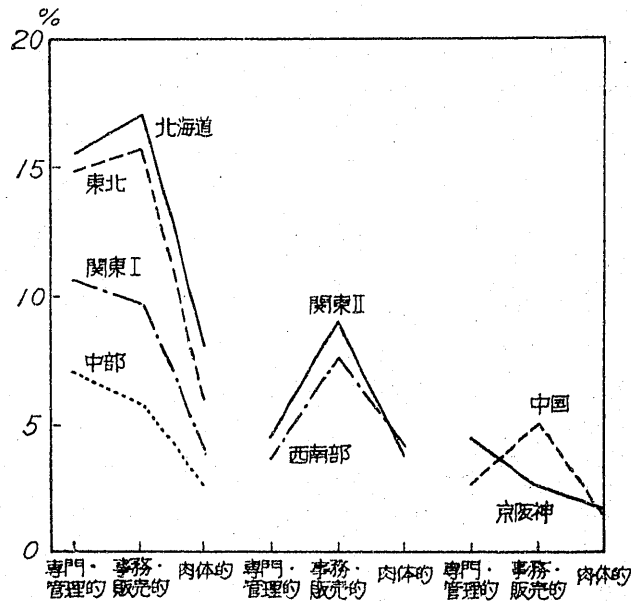
第4は、事務的・販売的職業の3食米飯パターンの割合が専門的・管理的職業のそれよりも低いという通則とは異なった構造をもっている地域であって、これは中国のみである。

第2節 昼めんパターンの職業別分布構造からみた地域類型

昼めん、朝・夕米飯のパターンの職業別分布構造を地域的にみると図12の如く、3個の地域グループに分けることができる。

第1のグループは昼めん、朝・夕米飯のパターンが一般的に高い水準にあり、かつ専門的・管理的

図12 昼めんパターンの職業別にみた地域類型

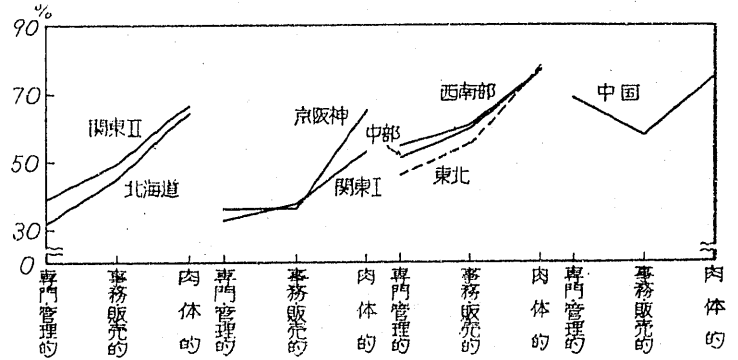


職業と事務的・販売的職業の両者がほぼ同水準
あるいは前者の方が高く、肉体的職業者のみが
著しく低い割合を示している地域である。東日
本の大部分の地域がこのグループに属する。中
部は、この昼めんパターンの割合が全般に低水
準にあるが、分布構造において類似しているた
めこのグループにふくめた。

第2は関東Ⅱと西南部の両地域であって、こ
こでは肉体的職業者と専門的・管理的職業者に
おいて同水準の昼めんパターンがみられるので
ある。

第3は各職業における昼めんパターンをとる
者の割合が一般に低水準にある地域であって西
日本の中国と京阪神の両地域が該当する。しか
し、中国では事務的・販売的職業が最高である
のに対して京阪神では専門的・管理的職業にお

図11 3食米飯者の職業別分布構造からみた地域類型



いて最高であり、両者の分布構造は異なっている。

昼めんパターンを職業別にみると前述の如く地域によってかなり異なった傾向がみられる。ただ、肉体的職業者においては昼めんパターンをとる者の割合が一般にもっとも低い傾向がみられる。しかし、関東Ⅱと西南部がふくまれる第2のグループでは、他の諸地域がふくまれているグループとは異なっている。

第3節 昼パン食パターンの職業別分布構造からみた地域類型

昼パン、朝・夕米飯パターンの職業別の摂取割合の分布構造を地域的にみると図13の如くであってほぼ3個のグループに類型化することができる。

第1は昼パンパターンの割合が職業によって著しく異なっており、かつ専門的・管理的職業がもっとも高く、次いで事務的・販売的職業、そして肉体的職業においてもっとも低いという分布構造をもった地域である。これには北海道、関東Ⅱ、東北の東日本の各地域がふくまれる。

第2は、昼パンパターンの割合が一般に低水準である地域であって、西南部、中部の地域が該当する。

第3は、前二者とは著しく異なった分布構造を示している地域で、それは関東Ⅰと京阪神である。関東Ⅰでは肉体的職業者において昼パンパターンが異例的な高い割合を示し、かつ専門的・管理的職業および事務的・販売的職業のそれよりもはるかに高いという特殊な分布パターンを示している。京阪神は各職業共に低水準にあり、かつ事務的・販売的職業がもっとも高い昼パンパターンの割合を示しており、第1、第2のグループとは著しく異なっている。中国は各職業の水準が京阪神のそれより若干高いが京阪神と同様な分布構造を示している。

昼パン食形態の地域別特徴はかなり複雑である。一般に、高度な職業において昼パン食形態をとる者の割合が著しく高いことがみとめられるが、京阪神や中国では事務的・販売的職業との間に著しい差はない。肉体的職業ではわずかに関東Ⅰを除いて一般にもっとも低い割合を示していることがみとめられる。しかし、この割合も地域によってその水準が異なっている。

第4節 朝パン食パターンの職業別分布構造からみた地域類型

朝パン食、昼・夕米飯パターンの職業別分布構造からみた地域類型を行なってみると図14の如くである。

第1は高度の職業において朝パン食パターンの割合がもっとも高く、肉体的職業においてもっとも低いという典型的分布構造をもつ地域である。関東Ⅰ

図13 昼パン食パターンの職業別にみた地域格差

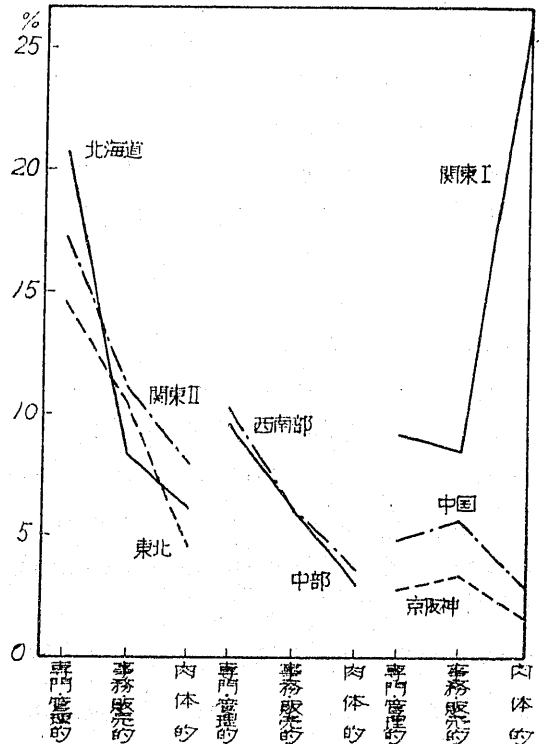
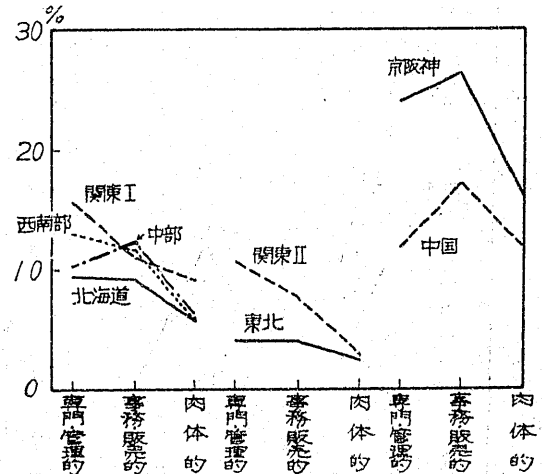


図14 朝パン食パターンの職業別にみた地域類型



を始めとして西南部，北海道の諸地域がふくまれる。中部のみは，事務的・販売的職業の朝パン食パターンの割合が専門的・管理的職業のそれよりも若干高くなっているが全般の水準からみてこのグループにふくめた。

第2グループは，第1と同様の分布構造を示しているが，朝パン食者の割合が全般に低水準にある地域で，関東Ⅱと東北が該当する。

第3は，事務的・販売的職業者の朝パン食パターンの割合がもっとも高く，かつ他の職業においてもこのパターンの割合が高いグループであって，京阪神と中国の両地域が該当する。分布構造が第1第2と全く異なっている点に特徴がある。

朝パン食水準が一般的に東日本において低く，西日本において高く，かつ専門的・管理的職業よりはむしろ事務的・販売的職業において高いことは注目すべきであろう。

第5節 職業別ならびに定着者・移動者別にみた主要主食形態選択の地域的特徴

各職業別人口を定着者か移動者別に区分して，主要主食形態の選択傾向を地域別に一括して示すと次表の通りである。詳細な分析は紙幅の関係上省略する。

表7 職業別，定着者・移動者別にみた主要主食形態選択の地域的特徴

職 業	北 海 道		東 北		関 東 I		関 東 II		中 部		京 阪 神		中 国		西 南 部	
	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動	定着	移動
(1) 3食米飯者 (111)																
総 数	40.9	53.9	74.0	55.8	51.5	42.0	62.5	52.4	71.5	62.8	66.7	47.2	69.2	64.7	72.4	63.3
専門的・管理的	7.1	84.3	54.8	42.5	41.9	30.3	34.8	40.4	54.3	50.7	45.5	35.0	48.0	70.2	57.7	54.0
事務的・販売的	25.0	48.1	61.4	51.7	43.4	38.4	56.9	45.6	66.6	55.9	64.4	29.3	60.8	55.2	64.1	59.6
肉 体 的	55.6	67.1	84.9	69.0	59.7	50.7	69.5	64.5	77.6	76.7	76.6	62.3	74.5	74.6	84.3	72.9
(2) 昼めん，朝・夕米飯者 (131)																
総 数	10.9	13.1	8.0	12.8	7.4	8.8	5.8	6.0	3.6	5.0	2.4	2.6	3.2	2.9	3.8	6.2
専門的・管理的	7.1	16.7	14.3	15.0	7.0	11.4	4.3	4.5	11.1	5.9	4.5	4.5	2.0	2.7	—	4.2
事務的・販売的	16.1	17.2	13.4	16.7	11.1	9.1	8.5	9.1	5.0	6.3	1.4	2.9	7.1	4.0	5.9	8.4
肉 体 的	9.1	7.8	4.4	7.9	4.8	7.4	4.1	3.7	1.7	3.5	1.9	1.7	0.9	1.7	2.2	5.2
(3) 昼パン，朝・夕米飯者 (141)																
総 数	13.5	8.2	8.2	9.1	9.0	7.0	10.4	10.4	5.1	5.7	3.0	3.0	5.3	4.8	5.3	6.1
専門的・管理的	35.7	18.6	17.9	13.3	14.0	8.0	32.6	14.3	13.6	8.5	4.5	2.5	16.0	4.0	13.5	9.7
事務的・販売的	12.5	7.6	11.7	9.7	11.1	7.4	10.8	10.9	5.3	6.3	4.1	3.3	5.7	5.7	5.9	6.1
肉 体 的	11.1	4.4	4.0	5.1	5.2	5.4	7.4	8.5	3.5	2.8	0.9	2.0	3.5	3.5	2.5	4.3
(4) 朝パン，昼・夕米飯者 (411)																
総 数	9.8	7.6	1.5	4.8	5.5	12.4	2.4	7.6	8.3	9.8	16.2	22.9	12.5	15.4	8.0	10.6
専門的・管理的	7.1	9.8	—	5.8	4.7	18.3	10.9	10.6	4.9	11.8	22.7	24.2	8.0	12.1	13.5	12.9
事務的・販売的	14.3	8.5	1.7	5.3	6.0	13.0	2.0	10.6	11.3	12.6	16.4	28.0	11.8	19.7	11.6	11.9
肉 体 的	3.1	6.4	1.6	3.5	5.5	10.9	1.9	3.3	6.5	6.0	12.1	17.0	13.0	10.8	3.1	7.3

Differential Attitude of Regional Urban Population in Dietary Behavior

Sumiko UCHINO

1. Surprisingly rapid urbanization mainly accelerated by industrial expansion and heavy migratory movements has greatly contributed to changing attitude and consciousness in way of living of people in the country. Highly developed mass communication network system was also an important factor. In this paper it is intended to focus on changing behavior of primary food selection, usually strongly resistant to change, which is traditionally characterized by rice-centered diet.

2. Basic data are derived from retabulation of the "Migration and Mobility Survey" results conducted in 1968 by our Institute in which about 17,000 male population living in 32 urban places in 16 prefectures, two cities in each prefecture, were asked to answer to questions mentioned in the previously distributed schedules.

3. Some analysis was made in connection with differential trends of primary food selection according to demographic and social-economic characteristics of respondents, namely age, education and occupation, which was partly published elsewhere*.

* Report of the 1968 Survey, vol. 1, chapter 3, March 1969, and my article "Demographic and Socio-Economic Characteristics and Primary Food Selective Behavior in Urban Populations" published in the "Annual Report of the Institute of Population Problems 1970".

4. Major concern here is to find out whether or not regionality still exerts any influence on selective behavior of primary food along with the general effect of age and social-economic characteristics of population. For that purpose 32 cities were grouped into 8 regions according to geographical location of each city.

5. Various patterns of primary food taking were distinguished according to different sets of three meals a day. Here four major patterns were taken out, namely rice-centered pattern for three meals, bread diet only in breakfast, and noodle or bread only in lunch and analysed by region.

6. Needless to say that the rice-centered diet for three meals are dominant in any regions. However, in general very higher percentage in rural regions, higher than 60 per cent and low in urban regions, around 50 per cent in Tokyo and Keihanshin region. Most interesting is that fairly different behavior is recognized between North-Eastern and South-Western Japan. Bread or noodle diet in lunch is more frequent in the former and bread diet in breakfast is more typical in the latter.

7. Regionality is an very important factor to be considered seriously particularly in such a field of food custom greatly resisting to change.